



2020年6月20日発行

湯梨浜町観光協会

〒682-0715 鳥取県東伯郡湯梨浜町はわい温泉5-22

TEL(0858)35-4052 FAX(0858)35-4701

H P <http://www.yurihama-kankou.jp/>

F B <https://www.facebook.com/yurihamakannkou>

湯梨浜町観光協会 会員募集中!!

湯梨浜町 温泉の物語 前編

はわい温泉
東郷温泉

～知られざる温泉発見の歴史～

「池」「湖」どっち？

町の中心にあり山陰八景の一つにも数えられている東郷湖。

古くから地元では「東郷池」と呼び、昭和8年 二級河川に指定された際の表記は「池」であり、国土地理院の表記も「池」ですが、幕末の伊能忠敬の測量図や明治6年の県政要覧、近年では三朝東郷湖県立自然公園など、度々「湖」と表記されています。このことから、鳥取県議会で「名称を変更してはどうか」という質問があり、平成20年7月 全5,486世帯を対象に「池」か「湖」のどちらを正式名称にするべきか湯梨浜町民の思いを集めるべくアンケート調査を実施しました。気になる結果は?? 回答を寄せたのはわずか204世帯、回答率は3.7%と大変低く、「東郷池」が71.6%、「東郷湖」が25.5%、「どちらでもよい」が2.9%という結果となりました。

湯梨浜町では、正式名称を「東郷池」とし、公文書等では「東郷池」を用いるが、団体などが「東郷湖」を使用してもよい(どちらかに強制しない)こととしたため、今でも二つの名称で呼ばれています。

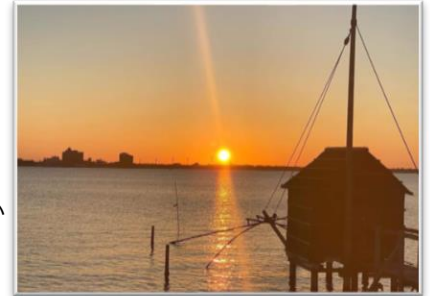
銅経筒に刻まれた銘文に「東郷」の文字

東郷池という名前は、所在地である東郷の地名にちなんで付けられたと考えられますが、東郷の地名がいつの時代から始まったのかは明らかにされておらず、大正14年、伯耆国一宮倭文神社経塚で発見された銅経筒(国宝)に「山陰道伯耆国東郷御座一宮大明神・・・」と銘記されていることから、

康和5年(1103)今から917年前の記録が最古であると考えられています。ついで正嘉3年(1258)「伯耆国河村郡東郷荘下地中分絵図」にも東郷の地名が記載されており、これには東郷池の絵図が明らかに描写されています。

温泉の記録 1792年初見あり

この東郷池では、遠い昔より湖底から温泉が湧き出ているといわれていますが、発見から現在に至るまでどんな歴史があったのでしょうか。江戸時代の文化・文政時代を過ぎる頃には、庶民の間で「四季湯治」という勤労の合間を利用した温泉湯治が盛んになり、温泉大衆時代を迎えました。この頃、有名な温泉地では温泉案内書や湯治心得などが発行され、文人墨客による温泉紀や紀行文なども数多く残されるようになり、山陰では城崎・浜村・三朝・玉造などの温泉地に見ることができますが、はわい・東郷においては残念ながらこのような記録が残されていないとのこと。



▶伯耆国河村郡東郷荘下地中分絵図



▶鉢伏山より眺める東郷池



▶かつての四ツ手網

その他、温泉発見以前の諸記録をたどってみますと、ついに(0 0 0)東郷池をめぐる温泉記事の初見がありました。

「和久島旧跡往来の紀」仙之丞 寛永4年(1792)(関金町誌/第二集)

…番匠、楠の沓本にて造り立て、投入れしどう(堂)と言伝ふ。釈迦、聖至、観音の三尊を表し、三徳山三仏寺と号す也。かかる霊仏霊場も、都の遠き片山陰、近国ならで邊境の、知る人ぞなき伽藍かな、北に見下るす東郷池、湖中に温泉湧出る。故に魚類の生ること、余の湖に勝たれたり。上に戴く御冠山、倭文の神社の大明神、下照姫の命にて、安産守護の御神也。氏子の産婦岩田帯と言事なし。別て婦人信心誠を祈時は難産と言事なし。耆伯(伯耆)なる御冠山に跡たれし、神の御影の添るうぶごゑ…

当時の百姓たちは農閑期を利用して信仰行脚の旅に出かけていたそうですが、このような紀行文は、自然地理、思考、風習を知る上で大変貴重な資料だといわれています。これは美作(岡山県)の人の記録ですが、この人がこのように温泉について記していたほどですから、池周辺の人々は、この頃からすでに湖中に湧き出す温泉のことは当然ながら知っていたものと推測できるようです。

(よくぞ記録してくれました。ありがとうございます！と心の中で感謝♪) その他いくつかの紀行文の中に、三朝や関金・玉造・温泉津など他の温泉地については記録されているものの、なかなか池の温泉について触れているものはありません。明らかに松崎・橋津・宮内を通り東郷池眺め旅していたはずなのに、仮に、東郷池からチラホラ湯けむりが上がっていたことに気が付いて

いても、気にも留めない程度の小さなものだったのか、いずれにしても本人の興味をそそらなければ「記録」することもなかったのかもしれない。続く、天保年間(1830年~1843年)「東郷池面鏡(とうごうちめんのかがみ)」

松崎中町 市橋榮寿軒月人(東郷町誌)のなかに、その所(蜀漆(くさぎ)地蔵、中興寺)より寅の方

(ほぼ東北)に当りて、中興寺といへる在所に温泉湧き出で、諸人病苦を退癒させしめぬれば、近郷近郡は申すに及ばず近国より人々入湯に参りければ(中略)俣野の郎等久留目才蔵という者、農家に入りて黄牛(あめうじ)(あめ色で上等な牛)1疋(びき)引出し来りて、この温泉に切つて落とし入れけり。

この后(のち)涌湯ぬけて、東郷の池中に湧き出ずるとなり。この事後代に残りて、湖中の湧湯を見聞して悵(惜)しまぬ人はなかりけり」と記されており、近郊からも湯治に訪れ疲れた体を癒していたのでしょう。

東郷池面鏡 表紙



江戸時代/藩へ温泉掘削願いを提出/薬湯としての利用

また、天保 14 年（1843）には浅津の六右衛門が湖中からお湯が湧いているのを発見し、竹樋で汲み上げて温泉であることを確認。このことを受け、松崎と浅津の代表者たちが庄屋を通じて藩に温泉開発を願い出ました。

藩は、お湯を汲むことは差し支えないとして願い出を許可しましたが、その後の経過は明らかになっていません。

安政 4 年（1857）4 月 7 日、松崎の「御用日記」によると、小鹿谷陣屋日比佐中から松崎の町年寄りに宛てて「かねて相話し居り候腰痛今以てさっぱり致さず（中略）難儀致し候に付」と、池のお湯を四、五荷届けて欲しいと書面で依頼しており、それに対し「…池中之湯之儀被為仰下 幸畏候得共 当月二日湯竹かやり居申候間 唯今獵師共江申付候得共 今日風強く候而 乍恐今日間合不申候間 左様御承知被為遺候 先は急書ヨ以御窺申上度 如欺ニ御座候 四月七日 尚々 湯上がり次第差上申候間 左様御思召可被為下候」とあり、汲み上げる竹が強い風で倒れ、直ぐには届けられない。汲み上げ次第お持ちします」という内容のやり取りが残っています。この頃から、温泉に浸かることで血行を促進し筋肉を和らげ、腰痛や神経痛にも効果があるということが



※挿絵はイメージです

が知られていたようです。

結局 11 日になってやっとお湯を汲むことができ、お湯五荷を舟で積み、肩に担いで小鹿谷まで運びました。

この時の費用は「汲ニ行物（者）江壹匁（いちもんめ）、人歩く（夫）小鹿谷行客人ニ付五分ツツ、五荷ニて二匁五分、都合三匁五分」（東郷町誌）とあり、現在では一匁は 1,250 円相当、都合三匁五分とありますから合計で 4,375 円かかった計算になります。

湖上温泉を楽しむ幸助氏

慶応 2 年（1866）上浅津村の湯村幸助は、東郷湖中部より自然湧出する温泉を見つけ、湖上に舟を浮かべ、源泉に孟宗竹を差し込んで舟の中の四斗樽（約 72 l）にお湯を溜め、即席の浴場を作って湖上で温泉気分を味わったそうです。（角川日本地名大辞典参照）

まさに湯舟ですな（´ロ`*）再現できるものならばぜひ入浴してみたいものです。

当時浅津村には漁師が多く、「幸助湯」として親しまれた湖上温泉は、漁の疲れを癒してくれる極上の湯だったに違いありません。湯村幸助氏 24 歳の頃でした。

しかし、波により湖面が上下し、風や波によって停泊していた舟が流されるなど不便なこともあり、明治 13 年頃には姿を消してしまったようです。この時のこの人物が、後の日進館（現在のわい温泉千年亭）当主になることを誰が予測したでしょう。

しかしこの源泉からのお湯はいつの頃か出なくなり、現在は幸助湯付近を掘削した新たな源泉（株羽合温泉共同開発事業団 管理）2 力所からポンプで汲み上げ、上浅津集落へ配湯しています。



▲再現された幸助湯の湯源泉



▲幸助湯跡（黄色印）2020 年 6 月撮影



明治 5 年(1872)龍湯島に初めての浴槽 龍湯温泉/芸者 伊藤葉玉の人気 /明治 17 年養生館開業

明治 5 年、吉田東伍編の『大日本地名辞書』によると湖中に湧く温泉とは別に、引地に鉱泉が見つかり、岸から六十間（約 110m）のところにて堤防を造り、対岸の東郷村「龍湯島」に湯槽を置いたとされています。

（明治 6 年 3 月「鳥取県一覽表」温泉の項目には龍湯島の温泉はすでに記載されています）かつての龍湯島は、現在の湯梨浜町役場東郷支所裏の湖岸辺りの湖中に浮かぶ島で、橋が架かっていました。

同じ頃、倉吉市の豪農であった山栢直好は引地地内で泉源を発見し、開発。この経緯にちなんで付近一帯は「明五ノ湯」（明治五年に開発された湯）という地名が付けられたといえます。直好は「養生館」という別荘を建て、人々の疲れを癒す大衆浴場、養生の場として村民にも開放しました。

そして、代が変わり 12 年経った明治 17 年（1884）旅館 養生館が開業。

この頃、湖中の泉源はもちろん、湖岸のあちこちで温泉湧出地点の探索が盛んに行われていたようです。

明治 36 年～39 年頃 龍湯島には 5.6 人が住み、毎年春から秋にかけて西伯郡・因幡・出雲などから千数百人が訪れ大変賑わったと記録されていますが、これは単に温泉を楽しむためだけの賑わいではありませんでした。

龍湯島には、三味線や長唄・義太夫節が大変上手いと評判の「葉玉」という芸者がおり、静かな夜は葉玉の奏でる三味の音と共に美しい声が池に響き渡ったといえます。



▲明治 43 年韓国皇太子李垠殿下が宿泊された時の養生館の風景。屋形船も浮かぶ



▲龍湯島にいた美人芸者 葉玉（はぎよく）



▲明治末期（推定）の龍湯島



▲東郷温泉 湖泉閣養生館/令和 2 年 6 月撮影

時折養生館にも招かれて得意の「サイサイ節」を披露するなど、ますますの人気を呼び、美しい葉玉会いたさに遠方からも多くの来客がありました。しかし、移り変わる世の中と共に葉玉も亡くなり、島の温泉は廃れ、ついにはお湯も出なくなり 12、13 年後には温泉は埋め立てられ島だけが残りました。

私たちが知る「養生館」が開業し、明治 37 年 3 月 15 日には官設鉄道（現在の山陰本線）が倉吉駅から延伸し、松崎駅（当時の所在地は鳥取県東伯郡東郷村大字中興寺字松原）が営業を開始。列車を利用するお客様が増え明治後半から大正にかけ、目覚ましい発展を遂げていきます。

一方、浅津温泉（現在のわい温泉）はどうなっていたのかということ？湖上温泉を楽しんだ幸助は、明治 19 年（1886）上浅津付近一帯を埋め立て掘削し、採湯に成功します。

次回のゆりはまにあ“温泉物語/後半”では、温泉の移り変わりから令和 2 年現在の最新源泉情報（源泉写真、配湯先など）までをお届けします。お楽しみに！！後半へ続く・・・♪

野花梅 手もぎ収穫体験

山田師匠に一日弟子入り★体験ルポ

■6月に入り、湯梨浜町野花の特産品「野花梅」が収穫シーズンを迎えました。湯梨浜町観光協会では着地型観光プラン（参加者が現地集合、現地解散する観光）として野花地区の農家さんとも協力し毎年3月初旬～下旬の梅の開花期に合わせ「野花梅溪散策プラン」を企画、運営しています。

花の美しさは知っているけど、たわわに実った収穫期はどうか？(´ロ´*)ということで、野花の梅農家である山田均さんに連絡をとり、一日農業体験を願い出ました。朝8時、日焼け止めクリームを塗りたくり帽子・手袋・タオルなどの身なりを整えて待ち合わせ場所へ。そこへ山田さんが登場！「いや～～今日は暑いでえ～。」



▲本日の師匠 山田均さん

聞くと、すでに早朝6時から作業を始めておられ、畑から一度降りて来てくださったようです。「もう汗びっしょり！作業は大変だよ。大丈夫？」「はい！頑張ります。師匠」軽トラックに乗り換え、農道をくねくねと進んでいきました。3月の開花期には案内の“幟”を立てる作業もあり、もちろん梅畑に来ることはありますが、こんなに緑豊かな野花の風景は初めてです。畑に到着。

「うわ～キレイ」青々とした葉の間にはぶつくりと丸い梅がぎっしりと実っていました♪今年は例年より2週間も早い開花を迎え、その後の霜の影響等で着果がばらつくのではないかと心配されましたが、何と“豊作”だということです。師匠から収穫のコツ、脚立の使い方を教わります。畑は斜面にあるため転倒防止のため脚立の脚の向きには細心の注意を払わなければなりません。なるほど！今まで斜面で脚立を使ったこともなければ脚の向きを考えたこともありませんでした。



▲収穫袋の梅をコンテナへ。傷つかないようにゆっくりと・・・

「えっ？ちょっと待って！もう？一緒に作業するのではなくて？」私の心の声は届かず(´ω´*)「ここは任せられたのだから、やるしかないのだ」そう言い聞かせると、少しでも役に立ちたいという熱い思いがメラメラと湧き上がってくるのでした。4月中旬、大豆大に実をつけた梅を約5cm間隔で間引き、一つ一つを大きく育てただけあって見事な玉太り。キュッとひねると簡単に収穫できるのですが、採りたい実だけが独立して成っているわけではなく意外と密集しているため、油断するとまだ採ってはいけない小さな実が手につれ、ポロっと取れてしまうのです。落ちた実は拾わなくていいと師匠に言われたけれど、何だか申し訳ない。しかし、慣れてくると“両手もぎ”をあみ出し（農家さんは当たり前でしょうか）テンポ良く袋に入れていきました。大玉をもぎ取る音がたまらなく“良い”のです。癖になりそう(๑*॰*॰)｡o♡ㄣ♡♡。

次にヘッピー腰で脚立に挑みました。しかし、採りたい枝の隙間と脚立の位置とのバランスが上手くいかず、頭をぶつける度に悲しくも落ちてしまう梅の実。（師匠ゴメンナサイ）見上げると目の前に現れる梅の実、右を見るとまた梅の実、左にも(´□´)♡

ちょっと視線を変えるだけで葉の隙間に隠れていた実も収穫することができました。あとは無心で作業、作業。そして10時の休憩、俗にいう“こぼしま”タイムです(´▽`*)冷えたサイダーを飲みながら世間話。山田師匠は今の農業（梨・柿・梅など）をする前、営農指導員として個々の農家さんの技術・経営指導や地域農業戦略の策定、農地利用調整、生産部会活動支援等の



▲自宅へ持ち帰り、選果作業。目で見てから機械で選別。3L以上、2L、L、規格外、廃棄に分けて箱詰めをします。



▲クルッとひねると簡単に ▲こんな木の際にまで！！収穫ができました



採った梅は首からぶら下げた収穫袋へ



▲脚立に上がると梅林と竹やぶの隙間から東郷湖やわい温泉が見えました。



ぎょっ

業務に携わっておられましたが、諸事情があり家の農業を継ぐことに。知識はあったため、すんなり始められたものの、いざやってみると木の個性や状態に悩まされ、なかなか思うようにいかなかったといえます。それでも諦めず、自然と向き合いながらようやく自分のやりたい農業の形ができたのだそうです。真面目な話に感動していると、師匠「足見てみない。」Σ(◎д◎)!!なんだこれは！！

足全体に、けたたましい数の緑のてんてん。俗にいうひつつき虫です。「虫じゃなくて草の種だけどチクチクするけ、ちゃんと取らんとえらいことになるで」師匠はうっかりこのまま洗濯してしまい、自分のパンツに付いたひつつき虫に気が付かず履いてしまい、叫んだことがあるらしい。それだけは避けたいところです。

休憩も終わり作業再開。こうして午前中までにコンテナ5箱（一箱八分目程度）を収穫しました。収穫した梅は自宅へ持ち帰り、選果作業。まずは目で見て傷のあるものを取り除き、三連自動選果機にかけます。ドラムの規格サイズの穴に入るとそれぞれの段ボールに入る仕組みです。

こうして箱詰めされた大梅は6月3日(水)から月、水、金の集荷に合わせて前日に収穫。出荷された野花梅は県内を中心に流通しています。また、6月19日(金)からは樹上で黄色くなるまで完熟させた完熟梅を梅津酒造(北栄町)の梅酒や、湯梨浜町商工会プロデュースの「げんき梅」加工品用として収穫することになっています。

青梅から完熟梅、加工品によって収穫時期を変え最高の状態で提供するのです。完熟梅の大きさは、ピンポン玉から卵サイズにもなるというから驚きですね。野花梅は昭和15年頃に発見された豊後系の梅ですが、以前は自家用の梅程度で剪定・摘果をすることもなく成りっ放しの小梅だったそうです。これをなんとか商品として売り出すことはできないものかと地域で見直すことになり、試行錯誤を繰り返すこと十数年。努力も梅も実を結び、大きな梅はたちまち評判となり、現在のような肉厚で濃厚な「野花梅」としてのブランド化に成功したのでした。

現在湯梨浜町では25戸の生産者が5haで「野花梅」を栽培しており、今年は13t(370万5千円)の出荷・販売を目指していきます。分けていただいた梅を自宅に持ち帰り梅仕事。師匠おススメの「白ワイン漬」とブランデー梅酒として漬け込みました。梅もそうですが、農業は自然相手の体力仕事。時には自然の猛威に打ちのめされることもあるかもしれません。しかし「次こそは」という強い信念と意欲、知識と経験が町の農産物を生み出す力になるのだということを知りました。農家さんが手塩に掛けて育てた「野花梅」。食卓を彩り豊かにする加工品や消費者の皆様の手により、美味しく召し上がっていただけることを願っています。(*~*)



TCC 番組 鳥取県出身の歌手 “歌で地域を元気に”

チーム osei with フレンド

■新型コロナウイルス感染症拡大防止のため外出自粛などを余儀なくされ気分がふさがちな皆さんを元気にしたいと、お晴さんを中心に鳥取県出身の歌手が集結した「チーム Osei with フレンド」が、TCC(鳥取中央有線放送株式会社)番組を通じて歌と踊り、メッセージを届けました。



▲お晴さん(中)率いる“ほほ笑み組”が踊るハワイ音頭

この日の収録は多世代交流センター ゆりりん館(湯梨浜町中興寺)にて無観客で行われ、鳥取市出身のシンガーソングライターである hacto(ハクト)さんや、鳥取市出身の演歌歌手高垣ひろ実さん、倉吉市出身の演歌歌手小谷貴代子さんが歌声を披露。

ハーフタイムショーとしてお晴さん率いる「ほほ笑み組」のハワイ音頭(昭和53年コロムビアレコード/唄 都はるみ)の踊りが始まると無観客ながら関係者から笑い声が。これはテレビの向こうがわの皆様もきっと同じように笑顔になっているはず(*>.<*)音楽の力、人の温かさで元気が湧いてくる そんなステージでした。

はわい温泉 旅館水郷オリジナル 手作りひょうたん展示販売中

■あの幻の! 手作りひょうたんが手に入ります。はわい温泉旅館「水郷」の先々代が心を込めて栽培・加工し、水郷に残してくれた貴重なお品(｡> 3 <) ♡ 知勇と開運をもたらす「大将ひょうたん」の未加工品、加工済品を展示・販売中です。

ひょうたんは夕顔の一種で、遺跡から種が発見されたことから最古の栽培植物と言われ、古来より縁起物や魔除けとして親しまれてきました。また、水やお酒を入れる容器や漁具や農具、装飾にも使われ、人々の生活に欠かすことのできないものでした。

美しく良いひょうたんを栽培するのも難しい上、乾燥させた状態にするまでには大変な手間がかかるのです。「大将ひょうたん」はとっとり百選に選ばれた逸品で、かつては湯梨浜町の特産品として岸田繁行氏(水郷の先々代)が中心となり生産・加工を行っていましたが、制作グループの高齢化等により思うように作品が作れず流通がストップしていた状態でした。その後、現在の岸田社長が繁行氏が生前作業場に使用していた倉庫から未加工や作業途中のひょうたんを発見。その数1,000個以上! 祖父の代から受け継いだ旅館と共に、綺麗で可愛いひょうたんを多くの人に届けようと、空き時間を利用して新しい作品づくりにも奮闘中です。幻想的な光を醸し出すひょうたんランプの和のインテリア。世界で一つだけの作品に出逢えますように。



▲ひょうたんを手にする水郷のおかみ左と岸田社長右



▲岸田社長が施したひょうたんランプ

＜はわい温泉 旅館水郷(湯梨浜町はわい温泉6-1)＞

手作りひょうたん展示販売 時間/13時~21時
 ・宿泊のお客様で忙しい時間帯は対応できない場合があります。
 未加工ひょうたん(素材) 1個 1,000円~
 加工済ひょうたん 1個 1,500円~
 ・混雑を避けるため 見学のみの方は入館料としてお一人様 100円を頂戴しております。ご了承ください。



湯梨浜町 PR 大使 谷本耕治

★湯梨浜町出身歌手谷本耕治さん 全国で活動中! スケジュールや近況、温かく人情味溢れる耕ちゃんのブログ「人生相場」は要チェック♪

<https://ameblo.jp/koji-tanimoto/> (問合) タニテツプロ合同会社 TEL/FAX 03-3361-3455